

## 夫婦ペアデータによる親としての発達意識の検討

加藤道代\*

神谷哲司\*\*

### 要約

乳幼児期から青年期後期における親としての発達意識諸側面の関連を検討するために、「関係性意識」「人格意識」「リソースの制約感」の3下位尺度を用い、父母ペア446組から得たデータを分析した。共分散構造分析の結果、リソースの制約感は父母ともに関係性意識と人格意識に正の影響を示し、一方の親の人格意識はパートナーの関係性意識に正の影響を示した。第一子年齢(0-5, 6-11, 12-17, 18-21歳)による親発達意識の差をみると、父親のリソースの制約感から人格意識へのパスは12-17歳で最も高く、父親におけるリソースの制約感から関係性意識間へのパスは、18-21歳よりも0-5歳と12-17歳の方が高かった。母親の人格意識から父親の関係性意識へのパスは、12-17歳よりも18-21歳が高かった。以上の結果から、リソースの制約は必ずしもネガティブだけではなく親発達変化の意識と関連していること、一方の親の変化を他方の親が認識することで家族の関係性意識が高まるという夫婦の相互性が示された。

キーワード：親発達, 父親, 母親, 子育て期, ペアデータ

### 問題と目的

わが国の人口動態統計を見ると、1971年～74年の第二次ベビーブーム以降、合計特殊出生率は全体として緩やかに減少傾向をたどり、少子化傾向が続いている(厚生労働省, 2015)。またその背後には、晩婚化(初婚年齢の上昇)や晩産化、婚姻率の低下、未婚率の上昇も確認されている(内閣府, 2015)。ただし、子どもから大人になっていく年代の視点にたってこれらの変化を考えてみれば、成人期の入口には、以前よりも多様な選択肢が広がっているということでもある。言い換えれば、結婚や出産、子育てだけが成人期の当然の目標や里程碑のように語ることはもはや難しいかもしれない。

一方で、結婚、子育ては必ずしも楽しいばかりではない。結婚のよくない点としてあげられた回答をみると、「行動の制限」「自分の自由になるお金が少なくなる」「自分の自由になる時間が少なくなる」など、自分の行動、もの、時間が自由にならないことに集中している(厚生労働省, 2004)。こうした自由の喪失的側面は、結婚後の子育てにおいても続いていく(森下, 2006)。つまり、多様な

---

\*教育学研究科 教授

\*\*教育学研究科 准教授

選択肢の中から選ばれたはずの“子どもを育てる”という人生コースにおいては、必ずしも即時的なメリットが期待できるわけではないということになる。

それでもなお、親となり子どもを育てることに力を注いでいく時、人はそのプロセスの中でどのように発達していくのだろうか。多様な選択肢が可能となった現在の成人期の姿を踏まえると、親になることが成人期に与える意味をあらためてとりあげることは、極めて現代的な、そして現実的な意味をもつと考えられる。

従来、発達心理学における親発達研究においては、妊娠後期から乳幼児の子育て期の親が焦点化されることが多かった。第一子が乳幼児期の親にとって、子育ては何もかもが初めての経験である。それは、子どもへの対処スキルの獲得、それまでの自分の生活スタイルや役割行動の調整（例えば、仕事、趣味と育児のバランスなど）や、周囲の人々（例えば、配偶者や祖父母、友人など）との関係の見直しを、急激に迫られる時期となろう。しかし初めて親になる移行期を超えてしまえば、親子関係が一定して変化がないかという、決してそうとは言えない。子どもも親も、自分の心身の発達変化や様々な能力、社会的役割の変化とともに、相手の変化との相互作用を体験し、さらに様々な環境との影響関係も含みながら、親と子の関係を維持、調整、変化させていく。その過程は生涯のスパンに及ぶ。しかし、成人発達の広い期間を背景とした親子の関係性に言及する研究はなかなか見られず、親となって子どもを育てるといふことの成人発達上の全体像は依然として明らかではない。

こうした問題意識から、加藤・神谷・黒澤(2015)は、乳幼児期から青年期後期までの子どもをもつ親を対象とした意識調査を行った。具体的には、親発達に寄与する先行研究(柏木・若松, 1994; 森下, 2006, 2012; 高橋・高橋, 2009)の結果を踏まえて、「親は親になってどのように変化したと思っているのか」という親発達意識に関する尺度項目を選択し、第一子年齢(親歴)をあらかじめ統制した各子育て期の対象者(父母ペア)を設定することで、幅広い年齢の子育てをバランスよく含みこむことから見えてくる親発達意識の全体像を確認しようとした。またその際、「～できなくなる」というリソースの制約感と、子どもが成長することへの寂寥感や後悔の念等のネガティブな側面にも注目した(詳細は、加藤・神谷・黒澤, 2015)。これにより、親が親になったことによる自分自身の変化に関する主観的評価について、長期的な子育て期間を視野にいった親としての発達意識を概観することを目標とした。

その結果、親としての発達意識は、父親、母親ともに「関係性意識」「人格意識」「リソースの制約感」の3因子が得られた。「リソースの制約感」は、時間的余裕や行動範囲の狭小化など、子育てに伴う制約や制限に関する認識である。「人格意識」は、角がとれて丸くなった、寛大になった、など、親になった以降の自分自身のパーソナリティに関する変化の認識である。これら「リソースの制約感」と「人格意識」に関して、父親と母親の構成項目は概ね一致していた。これに対して、広く子育てにまつわる他者との関係性を示す「関係性意識」では、父親と母親の間に一部項目に相違がみられた。詳細を見ると、父親の「関係性意識」は、「父-母-子」からなる自分の家族にむけられた関心、愛情、責任感などの意識の変化と、家族の営みの中で感じる安らぎや幸せを表す項目群(家族の中で幸せ

だと感じるようになった、家族への愛情が深まった、など)であったのに対して、母親の「関係性意識」は、それらを土台にしながらも、自分が育ってきた家族との関係、子育ての世代継承や、子ども全般にまたがる拡大的な意識が含まれていた(自分の親への感謝の気持ちが増した、自分の子ども以外の子どもに関心を向けるようになった、など)。

これらの親発達意識を第一子年齢群(子育て時期)と親性別(父親・母親)によって検討したところ、乳幼児期、児童期、青年期前期、青年期後期の子育て時期にかかわらず、母親は父親よりも、人格の変化をより大きく意識していた。また、リソースの制約感は、年齢と親性別の交互作用、性別の主効果、年齢の主効果がいずれも有意であり、乳幼児期の父親は青年期後期より、児童期の父親は青年期前期以降より高いものの、乳幼児期および青年期前期以降における母親の制約感は父親の制約感よりさらに高かった。

このように、加藤・神谷・黒澤(2015)では、親になる過程にはリソースの制約感とパーソナリティや人間関係の発達意識との併存とともに、父母それぞれの親発達意識の様相および父母や子育て期の差異が明らかになった。しかし、リソースの制約感という子育てのネガティブな側面と、親になったことによる発達意識というポジティブな側面の関係について、年代横断的に検討することは課題として残されていた。

また、父親のみ、母親のみの調査からは得られない「夫婦による子育ての姿」をとらえるには、父母ペアデータの分析により、両者の相互関連についても検討することが必要である。氏家(1999)は、子どもの誕生によって夫婦の生活が子ども中心になる変化を否定的に評価する母親もいるが、多くの母親がその変化をむしろよいことと受け取っていたと述べている。それは、個人としての時間や活動が著しく制約されても、その一方で、夫婦が2人一緒に行う親行動が増加することや、家庭の雰囲気がよくなり夫が父親としてふるまうようになるなどの点に望ましい変化を感じているからだとして示唆している。そうであれば、親発達の意識は、個人としてのリソースが制限され、子育てに向けられることによる影響を受けるが、それと同時に、パートナーにみられる親になったことによる変化からも影響を受けていると予想することができる。

そこで本稿では、加藤・神谷・黒澤(2015)において得られた親発達意識のデータのうち、「関係性意識」「人格意識」「リソースの制約感」注1を用い、「リソースの制約感」が「関係性意識」や「人格意識」にどのような影響を与えているのかについて検討する。親発達意識にみられる夫婦間の相互関連は、探索的にその影響関係をみていくこととし、補足的に年齢横断的な変数間の関連の差異も確認することで、加藤・神谷・黒澤(2015)の結果にさらに詳細な考察を加えることを目的とする。

## 方 法

### 調査方法と調査対象者

調査会社 U'eyes Design のデータベースに登録されたモニター(2012年時点で全国45万人登録)を、子ども年齢と親の性別の偏りを防ぐために、第一子年齢4群(0-5歳、6-11歳、12-17歳、18-21歳)×性別2群(父親、母親)について均等割り付けを行い、得られた父親母親446組のペア回答を分析

の対象とした。

オンラインモニターを対象として夫婦ペアデータを回収するにあたり、次のような手続きを踏んだ。最初に、モニターから本調査の属性に該当する協力者を選別するためにスクリーニング項目を設定し、婚姻状況では「未婚、既婚、離別、死別」において「既婚」、「子どもの有無」では「有」、「配偶者の2人各々（ペア）回答」では「承諾」と回答したモニターを対象とした。全ての項目に回答の得られた対象者について、年齢4群×父母2群の各8群のサンプル数が100名になるまでデータを収集した。回答に際しては、父母の一方が回答終了後、配偶者に交替するようにモニターに表示し、調査を継続してもらった。ペアデータ回答の信頼性担保のために、①最初に調査の主旨として「配偶者への質問と回答は見ないこと」「代理で答えないこと（本人が答えること）」を明示し、②交替後の全ての質問画面に、「先の回答者の配偶者の方がお答えください」を表示して回答者の注意を喚起した。

調査は2014年6月13－18日に実施され、各年齢群100組、計400組のデータがそろった時点で打ち切られた。その400組の夫婦ペアデータについて、1) 親年齢や子ども年齢、子ども人数の不自然な数値（例：親年齢と第一子年齢をともに15歳としたものや、子ども人数36名としたものなど）、2) 子どもの人数や年齢、性別について夫婦間で数値が不一致の場合に該当する15組のデータを削除し、さらに6月下旬に61組のデータを追加収集した。その結果、調査協力者は、446組の夫婦となった。父母ペアにおいて、子ども人数や第一子年齢にズレの生じるデータは、必ずしも単純なミスだけではなく、夫あるいは妻が子連れでの再婚の場合などにも生じる可能性が考えられる。しかしその詳細は不明であるため、本研究では、誤差を生じさせないように分析から除外することとした。回答者（分析対象者）の属性を Table1 に示す。

Table1 回答者の属性 (N=446組)

|        | 母 親   | 父 親   |
|--------|---|---|
| 年 齢    | 22～55歳 ( $M=41.42$ , $SD=5.72$ )  | 22～59歳 ( $M=43.17$ , $SD=6.01$ )  |
| 職 業    | 公務員14 (3.1%), 会社員116 (26.0%), 自由業13 (2.9%), 自営業10 (2.2%), 専業主婦243 (54.5%) その他50 (11.2%) | 公務員48 (10.8%), 会社員345 (77.4%), 自由業12 (2.7%), 自営業26 (5.8%), 専業主夫4 (0.9%), その他11 (2.5%) |
| 就業形態   | フルタイム94 (21.1%), パートタイム132 (29.6%), フリーランス12 (2.7%), 無職208 (46.6%)                      | フルタイム416 (93.3%), パートタイム5 (1.1%), フリーランス13 (2.9%), 無職12 (2.7%)                        |
| 子ども数   | 1人164 (36.8%), 2人219 (49.1%), 3人55 (12.3%), 4人7 (1.6%), 5人1 (0.2%)                      |   |
| 結 婚 歴  | 1～28年 ( $M=13.77$ , $SD=6.35$ )   |   |
| 家族形態   | 核家族381 (85.4%), 多世代同居家族65 (14.6%)   |   |
| 夫婦居住形態 | 同居427 (95.7%), 別居/単身赴19 (4.3%)  |   |

## 分析

親発達意識尺度の作成にあたって、親になったことでの変化に関して行われてきた先行研究（柏木・若松, 1994; 森下, 2006, 2012; 高橋・高橋, 2009）をもとに用意された30項目から因子分析によって抽出された「関係性意識」「人格意識」「リソースの制約感」の3下位尺度を分析に使用した。親発

達意識尺度の作成手順の詳細については、加藤・神谷・黒澤(2015)に記載のとおりである。各下位尺度の項目、Cronbach  $\alpha$ 、記述統計は資料として本論文の最後に示した。

父親と母親における親発達意識下位尺度間の相関係数を確認後、関連について仮説モデルを作成し検討し、その後補足的に年齢群ごとの多母集団同時分析を行った。分析には IBM SPSS Statistics 20 および AMOS20 を用いた。

### 倫理的配慮

実施にあたり第一筆者の所属組織の研究倫理審査委員会による審査と承認を得た(ID14-1-003)。調査は無記名方式であり、回答の中断が可能であった。インターネット調査は、パスワード管理をされ、アクセスと入力は一回に制限され、回答のコピーや印刷ができないように設定された。従って、回収調査票は生じず、研究者は個人を特定できないため、調査の匿名性は担保されている。

## 結 果

### 尺度間相関

各因子に該当する項目の平均点を算出し、親発達意識の下位尺度得点として扱うこととした。下位尺度間の相関係数を Table2 に示す。「リソースの制約感」と「関係性意識」の間には、父親では  $r = .41$ 、母親では  $r = .55$  の中程度の正の相関がみられ、「リソースの制約感」と「人格意識」との間にも、父親では  $r = .43$ 、母親では  $r = .45$  と中程度の正の相関がみられた(いずれも  $p < .001$ )。また、父親と母親相互の親発達意識間には、弱いもしくは中程度の正の相関が見られた( $r = .19 \sim .58$ 。いずれも  $p < .001$ )。

Table2 母親(M)と父親(P)における尺度間の相関係数(N=446組)

|               | MF1     | MF2     | MF3     | PF2     | PF1     |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| MF1母:関係性意識    |         |         |         |         |         |
| MF2母:人格意識     | .71 *** |         |         |         |         |
| MF3母:リソースの制約感 | .55 *** | .45 *** |         |         |         |
| PF2父:関係性意識    | .58 *** | .38 *** | .29 *** |         |         |
| PF1父:人格意識     | .37 *** | .42 *** | .19 *** | .68 *** |         |
| PF3父:リソースの制約感 | .32 *** | .24 *** | .45 *** | .41 *** | .43 *** |

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

### 父親と母親における親発達意識下位尺度間の関連

「リソースの制約感」と「関係性意識」および「人格意識」との間に正の関連があることが確認されたため、本分析においては、子育ての中で親が感じるリソースの制約感が契機となり、日常生活のさまざまな体験を経て、父母自身のポジティブな親発達意識、すなわち「関係性意識」および「人格意識」に影響を与えるプロセスを検討するモデル(モデルA)を構築した(Figure1)。

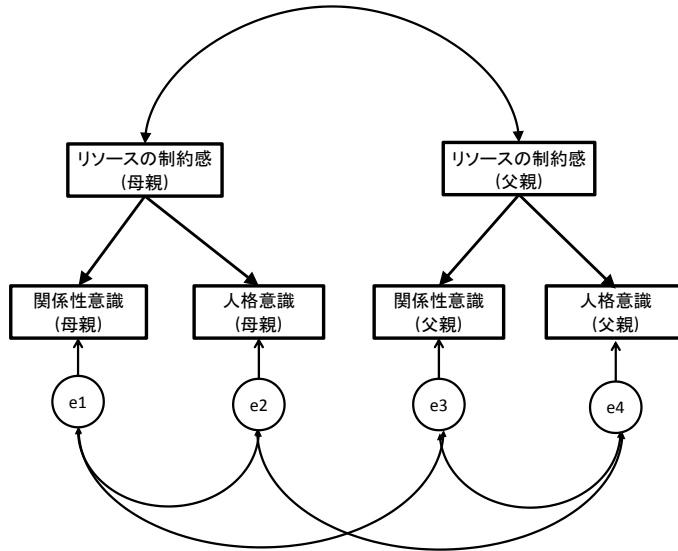
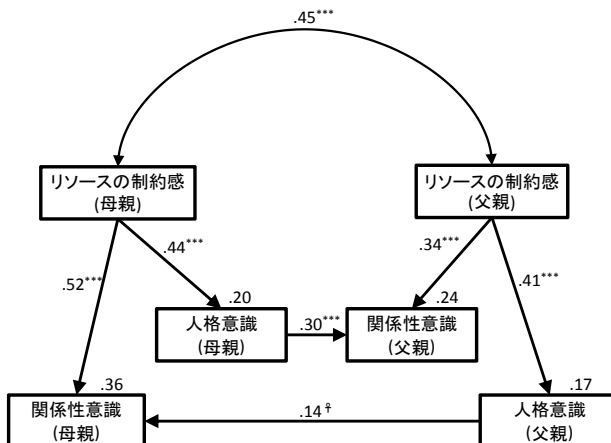


Figure1 親発達意識初期モデル

モデル A について、構造方程式モデリングにより適合度を算出したところ、GFI=.939, AGFI=.788, CFI=.931,  $\chi^2(6) = 86.667 (p=.000)$ , AIC=116.667, BIC=178.172, RMR=.067, RMSEA=.174 とモデルは適合しているとは言えなかった。そこで、修正指数が大きかった、母親の人格意識から父親の関係性意識へのパス (修正指数 19.383) と、父親の人格意識から母親の関係性意識へのパス (修正指数 18.511) を引いたところ (モデル B), GFI=.999, AGFI=.993, CFI=1.000,  $\chi^2(3) = 1.369 (p=.713)$ , AIC=37.369, BIC=111.175, RMR=.008, RMSEA=.000 と改善し、慣習的基準を



GFI=.999, AGFI=.993, CFI=1.000,  $\chi^2(3)=1.369, p=.713, AIC=37.369, BIC=111.175, RMR=.008, RMSEA=.000$   
 ※内成変数の誤差項ならびに、父母それぞれの関係性意識、人格意識の誤差項間の共分散については省略した。

Figure2 親発達意識最終モデル

概ね満たす結果となった。そこで、モデルBを最終モデルとし、子どもの年齢ごとの影響の違いについて検討することとした。

最終モデルについて見てみると (Figure2), 父母ともに、リソースの制約感は自身の関係性意識や人格意識に正の関連を示していたほか、父親の人格意識が母親の関係性意識に影響を与えるパスと、母親の人格意識から父親の関係性意識へのパスとともに正の方向での関係性が認められた。夫婦間で相互の関係性意識や人格意識が正の影響を与え合っていることが示されていると言えよう。これらの結果から、父母ともにリソースの制約感はポジティブな親発達意識に正の影響を与えること、ポジティブな親発達意識は夫婦間で相互に影響を与え合っていることが明らかとなった。

### 第一子年齢群による多母集団同時分析

次に、年齢群ごとにモデルの比較を行うため、モデルBに基づき、年齢群ごとに適合度を算出したところ、概ね  $GFI \geq .950$ ,  $AGFI \geq .900$ ,  $RMSEA \leq .050$  を示し、唯一、0-5歳で  $AGFI=.889$ ,  $RMSEA=.084$ , 18-21歳で  $RMSEA=.065$  という結果が示されたが、慣習的基準を大幅に下回るものではなかったため、モデルはどの年齢群においても十分許容できるものと判断された。次に、配置不変性について検討したところ、4グループを対象にした多母集団パス解析の結果は、 $\chi^2(16) = 20.049$  ( $p=.218$ ),  $GFI=.985$ ,  $AGFI=.923$ ,  $CFI=.997$ ,  $AIC=156.046$ ,  $RMR=.023$ ,  $RMSEA = .024$  と適合の良い結果が得られ、このモデルが全母集団に共通して適合度が良く、配置不変が成り立つ可能性が高いことが示唆された。そこで、モデルの各推定値に関するグループ間での差について検討し、パラメータ間の差に対する検定統計量が大きかったパス ( $z \geq 1.96$ ) について、等値制約を置いて適合度を検討したところ、 $\chi^2(27) = 64.957$  ( $p<.001$ ),  $GFI=.955$ ,  $AGFI=.861$ ,  $CFI=.968$ ,  $AIC=178.957$ ,  $RMR=.054$ ,  $RMSEA = .056$  と慣習的基準から外れるか、もしくは境界線上の数値であり、飽和モデルでは  $AIC=168.000$  であったことからこのモデルではグループ間に異質性を考慮することが妥当であると考えられた (Table3)。

Table3 多母集団同時分析結果 (N=446組)

|            |         | 0-5歳    | 6-11歳   | 12-17歳  | 18-21歳  |                        |
|------------|---------|---------|---------|---------|---------|------------------------|
|            |         | 標準化係数   | 標準化係数   | 標準化係数   | 標準化係数   | 係数の比較                  |
| MF1母・関係性 ← | MF3母・制約 | .56 *** | .58 *** | .51 *** | .39 *** | 0-5, 6-11>18-21        |
| MF2母・人格 ←  | MF3母・制約 | .39 *** | .44 *** | .50 *** | .46 *** |                        |
| PF1父・人格 ←  | PF3父・制約 | .34 *** | .32 *** | .58 *** | .36 *** | 12-17>0-5, 6-11, 18-21 |
| PF2父・関係性 ← | PF3父・制約 | .38 *** | .36 *** | .46 *** | .16     | 0-5, 12-17>18-21       |
| PF2父・関係性 ← | MF2母・人格 | .30 *** | .36 *** | .14     | .42 *** | 18-21>12-17            |
| MF1母・関係性 ← | PF1父・人格 | .25 *** | .22 **  | .25 *** | .32 *** |                        |

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$

次に、グループ間で異質であるとされたパスについてその推定値を見ていくと、母親の「制約感」

から母親の「関係性意識」へのパスでは、0-5歳群と6-11歳群は18-21歳群に比べて有意に高かった。母親の「リソースの制約感」から母親の「人格意識」へのパスは年齢群による標準化係数の有意な差を認めなかった。一方、父親の「リソースの制約感」から父親の「人格意識」へのパスは12-17歳群が他の年齢群に比べて有意に高い。また、父親の「リソースの制約感」から父親の「関係性意識」へのパスは、0-5歳群および12-17歳群が18-21歳群に比べて有意に高かった。父母相互の関係をみると、母親の「人格意識」から父親への「関係性意識」のパスでは、18-21歳群が12-17歳群に比べて有意に係数が高かった。父親の「人格意識」から母親の「関係性意識」は年齢群による標準化係数の有意な差を認めなかった。

## 考 察

### 1. 親発達意識における諸側面の相互関連

第一子年齢が4群(0-5歳, 6-11歳, 12-17歳, 18-21歳)にあたる父母ペアデータを用いて、親発達意識における「リソースの制約感」「関係性意識」「人格意識」の3下位尺度の関係について、個人内変数関係と個人間変数関係の可能性を含めて検討した。

子育てに携わることにより、時間、お金、行動範囲、趣味などのリソースは、それまでとはちがって自由に使えなくなるだろうと予測される。しかしそれは、新しい親役割に従事するために必然的に生じるリソースの制約感であり、その制約感は子育てにまつわる他者との「関係性意識」や、子育てを通じて自分自身が変化したと感じる「人格意識」を高めるのではないかという予想のもとに、仮説モデルを設定した。

最終モデルについて見てみると、父親母親のいずれにおいても、リソースの制約感から自分自身の関係性意識と人格意識に正の影響が示された。親として子どもを育てる生活は、経済的にも時間的にもエネルギー的にも余裕がなく、行動範囲や活動領域についても制約が大きくなって不自由さが増す。しかし本結果からは、その制約は必ずしもネガティブな面ばかりではなく、それが個人の人格と他者との関係性を変容させる親としての発達変化の契機となる面を持つことが示唆された。

鯨岡(2002)は親子を関係発達の面から考察し、養育の根幹には、自らの都合を半ば棚上げにすることで、かえって生まれてくる新しい喜びに出会うという面があると述べている。すなわち、子どもを育てることに伴う制約は、親役割への自己投入の度合であり、言い換えれば、人間発達のため的一种の“投資”としての側面を持つと考えてもよいかもしれない。ただし、本研究がとりあげたのは、子育てに伴い単純に「～できなくなる」面であったのに対して、制約感が子育ての困難感、不適応感として測定される場合には、親発達の阻害因となり得ることがわかっている(柏木・若松, 1994; 小野寺・青木・小山, 1998; 佐々木, 2009)。リソースの制約感が、単に「子育てが始まって～ができなくなった, 余裕がなくなった」という事実認識を超えて、負担感につながっている場合や不適応が懸念される場合は、周囲の適切な支援が必要であることは言うまでもない。

さらに本結果から、個人内における親発達意識の関係だけではなく、父母間の相互影響関係が明らかとなった。母親が自身の人格発達をより強く認識するほど、父親は自分の家族への愛情の高ま



りを認識している。また、それに比べると影響量は低いものの、父親が自身の人格発達をより強く認識するほど、母親は自分の家族への愛情に加えて、広く子育ての世代的繋がりや一般的な子どもへの認識をも含む関係性意識が高まる傾向も示唆された。すなわち、ひとつの家族を構成している夫婦において、個々に自身の父親あるいは母親としての発達意識が高まることを受けて、そのパートナーの関係発達の意識が高まるという相互影響関係である。これらの結果は、氏家(1999)が述べたように、子育てによって一方の親が変化することを、他方の親が受け止めることによって家族のまとまりが認識されていくという夫婦の連関を実証した結果と言えよう。

## 2. 第一子年齢群による係数の比較

次に、第一子年齢群を親にとっての子育て期ととらえ、係数の比較結果から考察を行いたい。0-5歳、6-11歳は未就学期の乳幼児期、6-11歳は小学生の児童期、12-17歳は中高生の青年期前期、18-21歳は高校卒業後の青年期後期にあたる。

まず、母親の「リソースの制約感」から母親の「関係性意識」へのパスは、乳幼児期と小学校の児童期中程度の関連があり、高校卒業後の青年期後期に比べて高かった。子どもが年少であるほど、養育ケアやしつけが求められ、母親の閉塞感が高まることは想像に難くない。しかし本結果においては、これら育児初期における「リソースの制約感」の高さが、家族への愛情や家族に向かう気持ちの高さにつながっていること、特に母親においては、自分が育ってきた原家族とのつながりや、自分の子どもだけではなく子どもというもの全般への視野が広がりを含む「関係性意識」との間に、子育て後期に比べてより強く関連が見られることが明らかになった。同時期の母親が、資源の制約を受けながらも、そのことによって対人関係世界を拡大し充実させていく様相について、加藤(2007)は、母親が自分をとりまく環境や他者の存在、その力や働きに気づき、相互援助を通じて親となっていく過程として質的に描いている。本結果は、加藤(2007)の指摘を定量的に表し、その結果を支持したと言えよう。一方、母親の「リソースの制約感」から母親の「人格意識」へのパスには年齢群による差はなく、いずれの子育て時期も一貫して弱い正の関係があることが示された。

これら母親の結果に対して、父親の「リソースの制約感」から父親の「人格意識」へのパスは、青年期前期において中程度の関連があり、弱い関連であった他の子育て期に比べると突出して高かった。また父親の「リソースの制約感」から父親の「関係性意識」へのパスは、乳幼児期および青年期前期では青年期後期に比べて高い値となっている。乳児期と青年期前期は第一反抗期と第二反抗期、あるいは、分離-固体化の時期(マラー、2000)と第二の分離-個体化(プロス、1971)の時期とも呼ばれ、親子関係に波乱や葛藤が生じやすいとされる時期である。子育て困難期とも言える両時期において、父親が自己を子育てに投入による制約感をより強く感じる事が、自分の家族への愛情や関係性認識の高さにつながっていたのは興味深い。父親にとって、乳幼児期と青年期前期は、家族に自己投入、自我関与する上での重要な時期であると考えてよいだろう。

次に、父母の相互関係をみると、青年期後期における母親の「人格意識」から父親の「関係性意識」へのパスは、両者が無相関であった青年期前期に比べて有意に高かった。すなわち、第一子が青年

期前期の頃は、父親と母親の関係は多様で一定の傾向を認めることはできないが、子育ての様々な局面を乗り越えた自立期には、母親が子育てを通じた自己の人格変化を感じるほど、父親は自分の家族との関係性意識を感じているという関連がより強くみられたといえる。一方、父親の「人格意識」から母親の「関係性意識」へのパスは、子育て期による標準化係数に有意な差を認めず、いずれの時期も一貫して弱い影響を示していた。したがって、子育てによって一方の親が人格的に変化することを、他方の親が好ましく受け止めることで、家族や子育てをめぐる他者との関係性が認識されていくという夫婦の連関(氏家, 1999)は、青年期前期の一部(母親人格意識→父親関係性意識)を除き、子育ての各時期を通じて作用していることが示唆された。これらのことから、子育ては、母子関係や父子関係に閉じられたものではなく、本結果が示した夫婦間の相互性を通じて、個人、夫婦、および家族の発達につながるということが予想される。

### 3. 今後の課題

本研究は、第一子が乳幼児期から青年期後期までの子育て期全体を視野にいれ、親になったことによる変化意識の全体像を描くことに専念した。横断的調査であるため、子育て期の差異に関する解釈には慎重でなければならない。殊に、昨今の父親は子育て関与に関する意識や動機は増加しているという指摘もあり(ベネッセ, 2015)、より低年齢の親の世代とより高年齢の親の世代における親発達意識の違いには、父親による子育て関与を促進する社会的変化を背景とした世代差が影響する可能性を考慮する必要もあるだろう。また、本結果は、親発達の意識面に焦点をあててきたが、夫婦がともに養育を行うための相互交流をとらえるには、行動面の変化を検討することも必要である。その際には、夫婦ペアに見られる相互作用のパターンや互いの認識のズレが、子育てを行う上での様々な葛藤および親発達意識につながることも予想される。これらを今後の課題としたい。

#### 【注】

- 1) 加藤・神谷・黒澤(2015)では、「関係性意識」「人格意識」「リソースの制約感」の他に「寂寥・後悔」に関する別尺度を設定し、4側面を用いてその後の分析を行った。「関係性意識」「人格意識」「リソースの制約感」は、子ども誕生以前と以後を比較した回答であるが、「寂寥・後悔」項目は、子どもの誕生以前との比較を含まず、子どもの成長に伴う認識であり、他の3尺度とは教示も異なる。そこで、本稿では「寂寥・後悔」を分析の対象としなかった。

#### 【参考文献】

- 浅野良輔(2011) 恋愛関係における健康生成モデルの個人内・個人間過程:カップルデータを用いた検討. 実験社会心理学研究, 50, 158-167.
- ベネッセ教育総合研究所 第3回乳幼児の父親についての調査速報版(2015年7月31日) <http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=4678> (2016年2月12日アクセス.)
- ブロス, P. 野沢栄司(訳)(1971) 青年期の精神医学 誠信書房. (Blos, P. 1962 On adolescence: a psychoanalytic interpretation. New York: Free Press.)

- 柏木恵子・若松素子(1994) 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の支援から親を研究する試み 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- 加藤道代(2007) 子育て期の母親における「被援助性」とサポートシステムの変化(2). 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55, 243-270.
- 加藤道代・黒澤泰・神谷哲司(2015) 子育て期の親発達意識の検討—乳児期から自立期までの第一子をもつ父親・母親を対象として— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 64(1), 59-73.
- 厚生労働省(2004) 少子化に関する意識調査研究 <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/seisaku/syousika/040908/dl/0010.pdf> (平成28年2月12日アクセス.)
- 厚生労働省(2015) 人口動態統計月報年計(概数)の結果. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai14/index.html> (平成28年2月12日アクセス.)
- 鯨岡峻(2002) <育てられる者>から<育てる者>へ—関係発達の視点から— NHK ブックス 日本放送出版協会.  
マラー, M. S., パイン, F., & バークマン, A. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳)2000 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳 黎明書房. (Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975) The Psychological Birth of the Human Infant. New York: Basic Books.S.)
- 森下葉子(2006) 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17(2), 182-192.
- 森下葉子(2012) 仕事と家庭間で生じる役割間葛藤と父親の発達との関連—共働き家庭の父親の場合— 文京学院大学人間学部研究紀要, 13, 155-165.
- 内閣府(2015) 平成27年版少子化社会対策白書 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper> (平成28年2月12日アクセス.)
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓(1998) 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究, 9(2), 121-130.
- 佐々木裕子(2009) はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因 母性衛生, 50(2), 413-421.
- 高橋道子・高橋真美(2009) 親になることによる発達とそれに関わる要因 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 60, 209-218.
- 氏家達夫(1999) 親になること, 親であること, “親”概念の再検討 東博・柏木恵子(編) 社会と家族の心理学 pp.137-162 京都:ミネルヴァ書房.

本研究は、科学研究費基盤研究(B)(2433019,研究代表者:加藤道代)の助成を受けた。本調査のデータの一部は、日本発達心理学会第26回大会および17th European Conference on Developmental Psychology において発表された。

## 【謝辞】

分析・執筆を進めるにあたり、ご助言・ご指導賜りました、東北大学大学院教育学研究科熊谷龍一先生、城西国際大学福祉総合学部大内善広先生に感謝申し上げます。

資料 (加藤・神谷・黒澤, 2015)

資料 親発達意識尺度の因子分析結果1 (最尤法・プロマックス回転, 446組の親)

| 項目  | 母親                            |      |      |      | 父親                           |      |      |      |
|---|-------------------------------|------|------|------|------------------------------|------|------|------|
|   | M (SD)                        | F1   | F2   | F3   | M (SD)                       | F1   | F2   | F3   |
| 関係性意識                                     | 3.89 (0.72) ( $\alpha=.95$ )  |      |      |      | 3.84 (0.74) ( $\alpha=.93$ ) |      |      |      |
| 19 家族のことを考えるようになった                        | 4.05 (0.89)                   | .89  | -.10 | .01  | 3.99 (0.91)                  | -.07 | .86  | .04  |
| 13 家族への愛情が深まった                            | 4.02 (.0.89)                  | .88  | -.08 | -.03 | 3.96 (0.92)                  | -.11 | .99  | -.04 |
| 2 子どもを持つ親の気持ちが分かるようになった                   | 4.09 (0.90)                   | .84  | -.12 | .08  | 3.91 (0.90)                  | .17  | .55  | .17  |
| 6 自分の子ども以外の子どもに関心を向けるようになった               | 3.80 (0.97)                   | .78  | -.03 | .01  | 3.52 (0.97)                  |      |      |      |
| 23 親子連れに関心を向けるようになった                      | 3.79 (0.95)                   | .77  | .00  | .04  | 3.6 (0.93)                   | .21  | .41  | .12  |
| 3 家族への責任感が増した                             | 4.00 (0.89)                   | .75  | -.03 | .12  | 4.04 (0.99)                  | -.04 | .85  | -.02 |
| 18 家族で安らぎを感じるようになった                       | 3.81 (0.96)                   | .74  | .10  | -.10 | 3.83 (0.95)                  | .04  | .89  | -.16 |
| 10 自分の親への感謝の気持ちが増した                       | 3.95 (0.97)                   | .73  | .03  | -.07 | 3.73 (1.00)                  |      |      |      |
| 7 子どもに関する社会の動きに関心を向けるようになった               | 3.91 (0.91)                   | .73  | .00  | .05  | 3.71 (0.88)                  | .21  | .48  | .12  |
| 16 家族の中で幸せだと感じるようになった                     | 3.95 (0.93)                   | .72  | .12  | -.06 | 3.90 (0.91)                  | -.01 | .92  | -.09 |
| 26 自分の親が自分をどのように育ててくれたのか考えるようになった         | 3.84 (0.98)                   | .71  | .04  | -.04 | 3.65 (0.95)                  |      |      |      |
| 1 自分と親の関わりを思い出し、将来の自分と子どもとの関わりを想像するようになった | 3.84 (0.93)                   | .71  | .10  | -.01 | 3.67 (0.92)                  | .24  | .41  | .17  |
| 11 子ども好きになった                              | 3.80 (0.98)                   | .60  | .17  | -.04 | 3.59 (0.96)                  |      |      |      |
| 12 子どもの目線でも考えてみるようになった                    | 3.81 (0.91)                   | .60  | .22  | .02  | 3.56 (0.87)                  |      |      |      |
| 21 自分が子どもの頃を思い出すようになった                    | 3.72 (0.95)                   | .58  | .10  | -.02 | 3.60 (0.95)                  |      |      |      |
| 人格意識                                      | 3.53 (.0.68) ( $\alpha=.88$ ) |      |      |      | 3.40 (0.66) ( $\alpha=.92$ ) |      |      |      |
| 22 角がとれて丸くなった                             | 3.29 (0.93)                   | -.15 | .87  | -.05 | 3.34 (0.91)                  | .80  | -.14 | .03  |
| 30 寛大になった                                 | 3.43 (0.91)                   | .02  | .77  | -.02 | 3.36 (0.87)                  | .85  | -.04 | -.06 |
| 4 考え方が柔軟になった                              | 3.51 (0.87)                   | .16  | .68  | -.08 | 4.04 (0.99)                  | .81  | -.02 | .00  |
| 25 突発的に異変が生じてあまり動じなくなった                   | 3.52 (0.93)                   | -.04 | .58  | .17  | 3.30 (0.83)                  | .69  | .03  | -.04 |
| 15 我慢強くなった                                | 3.65 (0.99)                   | .19  | .53  | .11  | 3.43 (0.91)                  | .79  | -.08 | .02  |
| 9 物事の結果だけでなく、その過程も見erようになった               | 3.64 (0.87)                   | .31  | .47  | .01  | 3.50 (0.86)                  | .60  | .14  | .08  |
| 14 精神的にタフになった                             | 3.71 (0.94)                   | .12  | .47  | .20  | 3.37 (0.86)                  | .78  | .02  | -.14 |
| 29 思慮深くなった                                | 3.49 (0.88)                   | .24  | .47  | .05  | 3.39 (0.85)                  | .69  | .05  | .01  |
| 20 他者に対して思いやりをもつようになった                    | 3.65 (0.88)                   |      |      |      | 3.43 (0.82)                  | .70  | .18  | -.09 |
| 8 時間を大切にするようになった                          | 3.70 (0.90)                   |      |      |      | 3.48 (0.91)                  | .44  | .20  | .15  |
| リソースの制約感                                  | 3.71 (0.82) ( $\alpha=.82$ )  |      |      |      | 3.44 (0.77) ( $\alpha=.78$ ) |      |      |      |
| 27 時間的余裕がなくなった                            | 3.87 (1.02)                   | .14  | -.20 | .83  | 3.54 (1.02)                  | -.03 | .01  | .80  |
| 24 自分の思うとおりに時間を使うことができなくなった               | 3.91 (1.02)                   | .13  | -.08 | .80  | 3.58 (1.04)                  | -.07 | .08  | .75  |
| 5 趣味に打ち込む余裕がなくなった                         | 3.63 (1.11)                   | -.06 | .07  | .72  | 3.34 (1.08)                  | .14  | -.12 | .65  |
| 28 行動範囲が狭まった                              | 3.47 (1.13)                   | -.21 | .24  | .57  | 3.17 (1.07)                  | -.04 | -.15 | .64  |
| 17 経済的な余裕がなくなった                           | 3.68 (1.12)                   | -.05 | .14  | .50  | 3.60 (1.08)                  | -.13 | .14  | .45  |
|   | 因子間相関                         |      | F1   | .65  | .62                          |      | .66  | .54  |
|   |                               |      | F2   |      | .39                          |      |      | .48  |

※項目番号は便宜的なものであり、実際の調査においてはモニタ画面にランダムな順序で表示された

# Parental Development of Fathers and Mothers with Children from Early Infancy to Adolescence

Michiyo KATO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Tetsuji KAMIYA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The present study aimed to examine how parents with a first child aged 0 to 21 years described their care-giving development. Study participants were 446 parent-pairs, grouped according to first child's age (0-5, 6-11, 12-17, 18-21) and then gender (parents). Factor analysis identified three factors for both genders: "enhancement of relatedness," "enhancement of personality" and "constraints on resources." Subscales showed high internal consistency (Cronbach's alpha 0.78-0.95). Structural equation modeling found constraints on resources positively influenced enhancement of relatedness and enhancement of personality in both gender groups. Enhancement of personality in one gender positively influenced enhancement of relatedness in the other. Parental development differences were examined by child's age. Children aged 12-17 years had the highest path coefficients between a father's constraints on resources and enhancement of personality. Path coefficients between a father's constraints on resources and enhancement of relatedness were higher for children aged 0-5 years and 12-17 than those aged 18-21 years. Coefficients between a mother's enhancement of personality and father's enhancement of relatedness were higher for children aged 18-21 years than those aged 12-17 years. Therefore, parental development is influenced by the resources invested in child rearing.

Keywords : parental development, fathers, mothers, childrearing periods, dyadic data

